

GLOBE Voice

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2016 Number 11

東京外国語大学



東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〈編集後記〉本号の特集では、本学の学生には当然のイベントである「留学」にスポットを当ててみた。世界諸地域、諸言語の社会や文化への気づきと、そこへの貢献を考える学生の例が多く集まり、壮観だ。東京外大とはこういう大学であり、世界的な視野に立ってこういう人材を育てているのか、そんなメッセージが企業人や本学志望の受験生に届けばうれしく思う。

(編集子) **V**

GLOBE Voice

グローバル・エイズ

2016 Number 11

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2016年10月発行

発行 東京外国語大学

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

総務企画課広報係

編集 広報マネジメント室

編集協力 日経B P コンサルティング

印刷 大日本印刷

アートディレクション 犬飼健二

表紙撮影 中川正子

デザイン 糸川あゆみ (大創デザインサイト)

©東京外国語大学2016

本誌記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。

tufsp2016100101

特集

グローバルで生きて行く。

90%。この数字、入学時のアンケートで
「大学時代に留学したいか」という質問に
「YES」と答えた東京外大生の割合。
入学したての学生の10人中9人が
世界に目を向けて動こうとしている。

文・坂下明子、凡平 写真・竹井俊晴



GLOBE Voice

2016 Number 11

2010年春に広報誌を創刊しました。タイトルは「GLOBE Voice」。「地球」と「声(=人)」という2つの言葉を合わせた造語です。東京外国語大学の使命は、「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。そのためには、さまざまな国の文化・歴史といった、背景を知ることが欠かせません。11号目となる今号は、東京外国語大学ならではの多様な留学のいまを特集します。



Contents

グローバルで生きて行く。—— 3

学長鼎談 —— 8

電気通信大学長 福田喬 氏
東京農工大学長 松永是 氏

graduated active persons
in society —— 14

桐朋中学校・高等学校 英語教員
田中敦英 氏
日本生活協同組合連合会 商品担当
柴田由佳 氏

person doing research —— 16
降幡正志 / ジョン・パトリック・ポーター

コラム「聴」 —— 20
谷口龍子 / 石川博樹 / 金井光太朗

歴史を刻む在学生 —— 24
国際社会学部(西南ヨーロッパ第2地域)3年
高橋佑樹

Information —— 26

世界の124校で 専門に磨きをかける 1年間の交換留学

東京外国語大学の留学は、6ヵ月から1年の長期海外留学と2ヵ月未満の短期海外留学に大別される。

長期留学で代表的なのは、協定校への交換留学で、2016年5月現在、世界53カ国・地域に124の協定大学・機関がある。3年生の夏学期から1年間留学して専攻言語や専攻地域の知識をより深める学生が多い。留学中の単位が卒業単位として認められるため、1年間留学しても4年間での卒業が可能だ。

協定校以外の大学などに休学留学※1や自由留学※2をする学生も多い(15年度は計482人)。また、留学の代わりに、企業や国際機関などで長期インターンシップを行う学生もいる。

長期留学で気になるのが費用のこと。交換留学の場合は海外での学費は発生しないものの、生活費は自己負担。渡航先や生活スタイルにもよるが、月に約4万〜12万円の生活費がかかる。協定校に派遣される学生の大半は、JASSO(日本学生支援機構)など給付型の奨学金(月額6万〜10万円)を利用している。

夏・冬学期は海外へ 個性的なプログラムで 経験と実力を養う

本学では2015年度から春・夏・秋・冬学期のクォーター制を採用しており、必修授業のない夏学期(7月中旬〜9月末)と冬学期(1月下旬〜3月末)に短期留学をする学生が増えている。

短期留学で最も多いのが、協定校で学ぶ約4週間の「ショートビジット」で、15年度には延べ493人(うち1年生254人)が参加。専攻言語の語学力アップ、英語力の強化、長期留学の準備など参加目的は学生によってさまざまだ。

事前の予備授業と事後の報告会がセットになった短期集中科目「スタディツアー」もある。15年度の在ジュネーブ国際機関訪問、16年度のリオ五輪通訳ボランティアなど、他ではなかなか経験できないプログラムが多い。

また、海外の協定校などから学生を受け入れるショートステイプログラム※3もあり、その実施にボランティアとして参加し、国内留学をする学生もいる。

※1 休学して留学するもののうち、単位認定の申請を行っているもの
※2 休学して留学するもののうち、単位認定の申請を行わないもの
※3 3〜4週間の短期集中日本語学習プログラム

Misako Niiyama

スタディツアーで 得られた 貴重な体験

リオ五輪通訳ボランティアの参加者は、英語とポルトガル語担当の計24人で、出発前にスポーツ選手のインタビュー動画を使った通訳研修がありました。

リオでは、メインプレスセンターに配属され、報道関係者への案内やインタビュー音声の翻訳などを担当することに。マニュアルや説明もなく、ブラジルリーダーの物事の進め方に最初は戸惑いましたが、見よう見まねで道案内をしたり、Wi-Fi接続の問い合わせに対応したりしました。

多国籍の現場で英語を使って働けたのは貴重な体験でし、インタビューの翻訳や観戦を通じて、日本人選手の活躍を共有できたのはとてもうれしかったです。インパウンドの仕事に関心があるので、社会人で迎える東京オリンピックでも、ぜひ何らかの形で関わられたらと思っています。

スタディツアー(2年次・夏)

ブラジル

リオ五輪通訳ボランティア

国際社会学部 西南ヨーロッパ地域
フランス語 2年

新山美紗子さん

にいやま みさこ

case 4

case 3

ショートビジット(1年次・夏)

ベトナム

ハノイ国家大学人文・社会科学大学

言語文化学部 ベトナム語
東南アジア地域 1年

野村純太さん

のむら じゅんた

Junta Nomura

足を運んで 初めてわかる その土地のこと

ベトナム語専攻では、1年生夏学期のSV※が恒例となっています。午前中はベトナム語の授業、午後は現地企業の見学や現地学生との交流プログラムがあり、最後の2日間は見学旅行でした。

正直言って、1年生の夏の段階で行っても……という思いもありましたが、実際に足を運んでみて、どんな国なのか様子をつかめたのは収穫でした。首都だからビルが林立しているかと思いきや、ハノイは歴史を感じさせる落ち着いた町だなとか、南部と北部では気候も言葉も違うなとか……。

アジアの中でも将来性が大いと思っベトナム語を選んだのですが、町には若者が多く、人々のエネルギーをすごく感じました。次は、素通りしたベトナム中部も訪ねてみたいし、長期留学も考えてみようと思うようになりました。

※SV=ショートビジット

case 2

交換留学(3年夏から10ヵ月)

フランス

パリ政治学院

国際社会学部 西南ヨーロッパ地域
フランス語 4年

池田康太さん

いけだ こうだい

Koudai Ikeda

マイノリティを 経験し 考え方が寛容に

パリ政治学院の授業では、2人1組で与えられたテーマについてプレゼンを行うなど、得た知識で自分の考えを組み立てることが求められました。留学生の多い大学で、英語で行われる授業もあれば、フランスを知る科目としてワインや料理の授業もありました。

留学中にできるだけ成長するには、インプットだけでなく、積極的なアウトプットが必要と考え、夏にはドイツで開催された学生会議に日本メンバーとして出席し、最後の2ヵ月間はベンチャー企業でインターンシップもしました。

フランス社会という多様性の中で「マイノリティの一部」になってみて、異なるものに対してとても寛容になりました。将来の選択肢も増え、留学前は日本企業にと考えていましたが、今は海外企業や進学も視野に入れています。

Haruna Iizuka

言語・地域に 固執せず 視野を広げたい

希望していたシリアへの留学がかなわず、パレスチナに留学しました。アラビア語だけではコミュニケーションに不安があり、交換留学の直前にSV※でアイルランドに行き英語力を強化しました。

ビルゼイト大学では、留学生向けのアラビア語プログラムを受講。多少のトラブルもありましたが、私の住んでいた町は治安面の問題はありませんでした。また、異なるバックグラウンドを持つ人と働く中で、自分なりのアプローチを探したいと帰国前にマケドニアに寄り、シリアからの難民の支援活動にも携わりました。

留学での一番の発見は、宗教による問題や対立は「中東だから、イスラム教だから」というものではないということ。中東やアラビア語にこだわらず、もっと視点や世界を広げていきたいと思っています。

※SV=ショートビジット

ショートビジット(3年次・夏)

アイルランド

アイルランド国立大学コーク校

国際社会学部 西アジア・北アフリカ地域
アラビア語 4年

飯塚遥奈さん

いづか はるな

交換留学(3年夏から8ヵ月)

パレスチナ

ビルゼイト大学

case 1



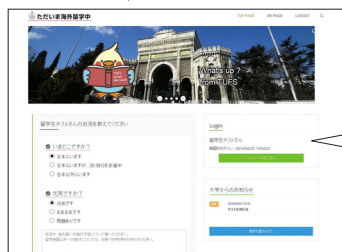
GLOBE Voice No.11
Special Feature
2016 October

Support System

危機管理

ただいま海外留学中

渡航後、留学生はこのサイトを通じて大学と連絡を取りあうことができる。コメントをそえてくれる学生も。



無事ホテルに着きました。トランジットの時間を利用して、シンガポールでツアーに参加します。

8/21に学校が終わるので、その後モスクワに4日滞在して8/26に帰国の予定です。

徐々に友人が増え充実した日々を過ごしています。食事の準備に少々悩み中。

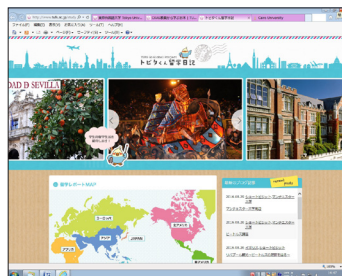
大学でのアクティビティを通じて、友達作りに励んでいます。

元気なのですが、飛行機で預けたスーツケースが届かなくて困っています。

情報収集

トビタくん留学日記

東京外大生の留学生活がわかるブログ。勉強以外の文化や歴史、リアルな日常の様子がわかる。



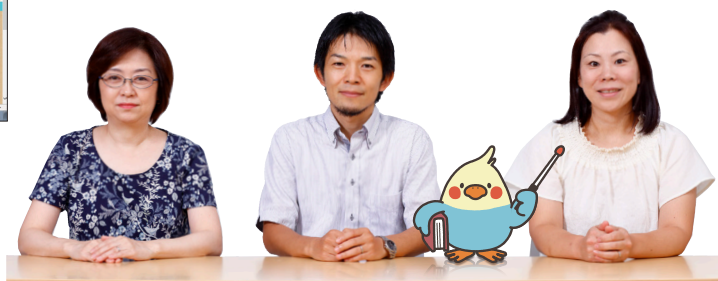
この他、東京外大生600件以上の留学体験を閲覧できる「留学体験報告」も用意している。

■ 交換留学の体験談
<https://mdle.tufs.ac.jp/exchangeReport/ryugaku>

■ ショートビジット留学の体験談
<https://mdle.tufs.ac.jp/exchangeReport/visit>



本学オリジナルの留学手引きとハンドブック



私たちが留学をサポートします

留学支援共同利用センター
(通称：トビタセンター)
本部管理棟1F、留学生課

私たちは情報を提供し提案をするだけ。決めるのはあくまでも学生本人です。留学は準備の段階から始まっています!!

経験豊富なスタッフと新システムで学生をサポート

学生の留学をサポートしているのが、留学支援共同利用センターだ。毎年数百人の学生を送り出している経験豊富なスタッフが、学生からの相談に対応している。

留学前の学生には、留学や奨学金の情報提供、個別相談申請のサポートなどを行うほか、ハンドブックやオンライン教材を通じた危機管理教育も実施している。

との連絡や緊急時の安否確認などがとれるため、危機管理の体制も整備された。また、主要な海外協定校には、日本語教育・日本教育の拠点として「Global Japan Office」が設置されており(2016年8月時点で10カ所)、本学から派遣されたスタッフが留学生のサポートに当たっている。

[ネットワーク]

教員や先輩から得られるリアルで具体的な情報

留学する学生にとって心強いのが、東京外大ならではの縦・横のネットワークだ。

キャンパスには各分野の第一線で活躍し現地にも詳しい教員や、約80点などの貴重なアドバイスが受けられる。

学校選びや留学準備で役立つのは、実際に留学を経験した先輩の情報だ。留学支援共同利用センター(通称トビタセンター)では、個別の留学相談に応じてくれるほか、毎年10月に学内で開催される留学フェアでは、先輩の生の声を聞ける留学地域別の座談会や留学体験報告会を設けている。

また、交換留学とショートビジットの体験談をデータベース化した「留学体験報告」(現在600件以上を掲載)、留学先のリアルな情報をブログ形式でつづる「トビタくん留学日記」など、ウェブサイトで留学のリアルな情報を公開している。そして、留学先でも、世界各地で活躍するOB・OGたちが、留学生をさまざまな形でサポートしてくれる。

case 6

ショートビジット(2年次・冬)
メキシコ
グアナフアト大学

休学留学(3年次から1年)
メキシコ
メキシコ国立自治大学

Kaiya Watanabe

積極的な交流で言葉や国を超えた一対一の関係に

3年次からの長期留学の「基盤作り」のつもりで、SV[※]に参加しました。私が参加したプログラムは、語学のほかに自分でテーマを決めるフィールドワークの課題もあったので、言葉を学ぶよりも言葉を使って何かをしたいという私の目的にぴったり。午前中は現地の学生に片っ端から声を掛けて、自分のテーマである「メキシコの公教育」についてのアンケートを採り、午後は語学の授業を受けました。

積極的にメキシコ人と交流するようにし、誘われたフィエスタ(パーティー)には必ず出かけました。夜遅くまで語り合い、言葉や国を超えた一対一の人間関係も築けました。メキシコで取り組みたいことも見えてきて、長期留学への大きなステップになりました。

※SV=ショートビジット

Asami Ishiyama

やりたいことは進路の決定前に体験してみて!

もともと国際協力に関心があったので、大学で学ぶよりはさまざまな体験をしたいと思って、留学ではなく国際NGOの現地事務所での長期インターンを選びました。担当していたのは、現地事務所のブログ更新、支援報告用の撮影、簡単な通訳などです。

国際教育のゼミに入っているので、空き時間には近くの小・中学校で授業を見学させてもらい、週末には支援する農家でホームステイも体験しました。

言葉も上達しましたが、「カンボジア人」や「農家」としてカテゴライズせず、ひとりの人間として関わることの大切さを学べたのが最大の収穫でした。また、農業や環境教育に触れてみて、日本への関心も強くなりました。進路を決める前に貴重な体験ができて何よりでした!

case 5

長期インターンシップ
(3年次から1年)

カンボジア
コンボンクディ

国際社会学部 東南アジア地域
カンボジア語 3年

石山麻美さん
いしやま あさみ



「連携」と「協働」で

グローバル人材の育成を目指す

Takashi Fukuda

Tadashi Matsunaga

Hiroataka Tateishi

電気通信大学長

福田 喬

東京農工大学長

松永 是

東京外国語大学長

立石 博高

2015年、西東京にある3つの国立大学法人が結集し、ある画期的な試みがスタートした。
科学技術の教育研究に取り組む東京農工大学・電気通信大学と、世界の言語・地域の教育研究に取り組む
東京外国語大学。個性豊かな3つの大学が連携し、実践型グローバル人材の養成に乗り出したのである。
この取り組みは、「西東京国際学究都市構想」に基づくものであり、3大学が共同申請した文理協働型人材

養成プログラムは、「平成27年度 大学の世界展開力強化事業(中南米)」に採択された。その目的は、外国語
の実践力と国際感覚を具え、地球的規模の課題解決能力を持った“文理協働型人材”を育成することにある。
このエポックメイキングな試みによって、3大学は何を実現しようとしているのか。3人の学長が、日本の教育の
未来像とグローバル化時代の人材育成について大いに語り合った。

文・吉田耀子 写真・竹井俊晴

立石博高学長（以下、立石） 電気通信大学、東京農工大学および東京外国語大学は、西東京地区の半径5キロ圏内にあり、それぞれ大変特色のある国立大学法人です。21世紀のグローバル社会において大学が社会的使命を果たしていくためには、特色のある大学同士が互いに連携し、より良い教育・研究を進めていかなければいけない。そうしたい思いから、3大学連携という形で協議を重ねてきました。この3大学の取り組みについては、文部科学省や社会一般からも、大きな関心が寄せられています。まずは、それぞれの大学が何を目指しているのかについて、ご紹介したいと思います。

バウンダリーを壊すことが課題発見と問題解決への道

東京外大は、「世界諸地域と日本を結ぶ教育研究の拠点大学」を目指し、「世界の言語・地域の理解を基盤として異文化間の理解を深め、地球社会の人々の共存・共生に寄与する」ことを基本的な目標としております。しかし、人文系の知識だけに頼っているのは、目標の実現は難しい。本学と異なる特色を持つ大学と連携しながら、新しい人文知のあり方を追求したい——そんな思いから、私たちは大学間連携を大変重視しております。

松永是学長（以下、松永） 農工大は、農学・工学を中心とする、実践的な理系の教育研究分野を備えた大学です。第3期中期計画では、「世界が認知する研究大学へ」という中期目標を大きく掲げ、

（intercultural）。人・もの・金・情報が溢れる21世紀社会においては、国家のみならず文化（culture）の壁も超え、異文化理解・多文化共生を目指す姿勢や学問への取り組みが必要になります。

3つ目は「インターディシプリナリー（interdisciplinary）」世界が認知する研究大学となるためには、従来の専門分野（discipline）の壁を超え、真に学際的（interdisciplinary）な教育研究を行うことが必要です。その意味で、農工大・電通大・本学それぞれの特色がうまく融合し、刺激し合えるようなシナジー効果が生まれることを期待しております。松永 農工大が専門とする農業・工業の分野でも、異文化理解は強く求められています。農業や工業の世界では、早くから多様な文化を持つ国々との間で密接な関係を築いてきました。たとえば日系自動車メーカーの工場も、欧米や東南アジア、中東、東アジアなど世界中に広がっています。科学技術面のみならず、その背景となる文化をより深く理解しないかぎり、本当にいいものは作れない。また、ものづくりや輸出入を通じて海外と交流することもできないと思います。

福田 グローバルには良い面と悪い面がある。今は政治・経済も含めて、グローバルに価値の波及・伝播が起こりやすい状況であることはたしかです。一方では、グローバル化を背景として大変な競争社会が到来している。その事実を直視しながら、「人間社会の幸せのためのグローバルイズムとは何か」を考える必要があると思います。

グローバルイズムには

光と闇の両面がある

福田 喬



ふくだ かし

電気通信大学長／1970年3月京都大学理学研究科地球物理学専攻修士課程修了。同年5月電気通信大学助手。90年8月ドイツ・マックスプランク超高層物理研究所招聘研究員。電気通信大学電気通信学部教授、同電気通信学部長、理事、副学長などを経て2014年4月より現職。

4つの具体的な目標を定めました。「世界と競える先端研究力の強化」「国際社会との対話力を持った教育研究の推進」「日本の産業界を国際社会に向けて牽引」「高度なイノベーションの養成」——この4つの目標を達成するために、人事制度の改革を進め、優秀な若手や女性、外国人などの研究者が集まりやすい環境づくりを進めています。

また、食料・エネルギー・ライフサイエンスの3分野を研究重点分野とする「グローバルイノベーション研究院」を新たに設置。海外の「スーパ教授」を招聘し、国際共同研究や国際共著論文を飛躍的に増やそうと努力しています。

福田喬学長（以下、福田） 電通大では、科学技術イノベーションを先導する高度人材を育成するため、2016年4月から学部・研究科を大幅に改組・再編しました。

本学では、他大学にない特色ある概念として「総合コミュニケーション科学」（人間・社会・自然の秩序を形成する、物・エネルギー・情報を介した相互作用をコミュニケーションと捉え、その本質の理解と機能向上を研究対象とする学問）を掲げています。その根幹には、「バウンダリー（境界線）を壊すような幅広い見方によって対象を捉え、物事を解決に導く」という考え方があります。大学や先生方は、ともすれば専門領域に

そのためには、各々の地域がお互いの価値を認め合い、尊重しなければならぬ。その意味で、東京外大の地域研究は1つの規範を提供できる学問分野だと思います。電通大にはこうした分野の知見が欠けているので、ぜひご教示いただきたいと思っています。

異文化を理解しないかぎり地域の課題は解決できない

立石 今回、農工大と電通大の資料を読ませていただき、科学技術分野でも人文系と同様の問題意識があることを知って驚きました。農工大

も電通大も、「人と自然との共生」を大変重視されています。グローバルイズムは、文化間の摩擦を生むだけでなく、人と自

然との関わりという面でも深刻な問題をもたらしている。こうした面からも、グローバルイズムの中で進行している問題を考える必要があります。

福田 「人と自然との共生」に関する1つの例として、私が学生時代に学んだこととお話したいと思います。地球の外側にはヴァン・アレン帯という放射線帯があるのですが、今やそのエネルギー粒子分布は、原始の姿からかけ離れてしまっているのです。その原因となったのは、大戦後から1950年代にかけて、南太平洋地域で盛んに行われた核実験です。この



閉じこもって壁を作る傾向がある。そこで、今回の改組では、学部の「学科」を廃止し、ゆるやかにまとまった3つの「類」に再編。大学院でも、従来の2つの

研究科を1つに統合しました。この改組・再編によって、学生は自分が学びたい分野を「プログラム」という形で幅広く選べるようになりました。今回の改革で、「総合コミュニケーション科学」の具体化に向けて一歩踏み出すことができたと考えています。

私は、大学における教育力・研究力強化のベースは「個人の力の最大化」にあると考えています。個人の価値観や方法論、実践を尊重する一方で、組織としてはバウンダリーを壊す方向に引っ張ってきたい。その1つが「連携・協働」であり、今後は、西東京3大学の連携を大きな柱にしたいと考えています。

立石 今、「バウンダリーを壊す」というお話がありましたが、私も同感です。やはり既存の学問や教育では、グローバル化社会に十分対応することはできない。そこで、私は常々「3つのインター」ということを学生たちに言っています。

1つ目は「インターナショナル（international）」国（nation）というバウンダリーの壁を壊して相互に理解しなければならぬ、ということ。2つ目は「インターカルチュラル

実験によって高エネルギー粒子が大量に放出され、ヴァン・アレン帯に捕らえられてしまった。地球が形成された時の自然の状態を、人間が変えてしまったのです。自然はある種のコミュニケーション、すなわち物やエネルギーや情報のやり取りを含めた相互作用によって全体のバランスをとっています。ところが、そこに人間が不当に介入すると、自然のバランスが大きく崩れてしまう。私たちは人と自然とが共存できるよう、総合的なバランスを考慮しながら、人間の豊かさを追い求めなければいけない。そのためには、バウンダリーや既存の学問領域を超えなければならぬ。それが「総合コミュニケーション科学」の意味合いだと考えています。

松永 今のお話を現代の我々に身近な問題に引き寄せると、「人と自然との共生」を考える上で、環境問題や食料問題は大変重要です。地球上のさまざまな地域で人間が生きていくためには、食料とエネルギーが必要で、環境も整っていないければなりません。我々は理系の立場から、これらの問題を解決していかなければならない。ただし、その背景にある文化を理解しないかぎり、それぞれの問題を解決するのは容易ではない。

文化間の問題を解決するためにはコミュニケーションが大切ですから、3大学の連携は今後ますます強めていく必要があると



思います。

立石 同感ですね。環境との関係でもう1つ具体例を挙げたいと思います。

今、パーム油の生産に起因する環境破壊が問題となっています。パーム油はアブラヤシの果肉から得られる油脂で、食料や石鹸、洗剤、化粧品などに幅広く使われています。ところが、このパーム油の原料となるアブラヤシを栽培するため、インドネシアやマレーシアの貴重な熱帯林が伐採されているのです。そのため、現地の農業社会が崩壊しつつあります。先進国の人々の都合で、これ以上の伐採を進めてもよいのか、ということです。

このように、地球規模で考えると、いろいろなものが見えてきます。地球環境や地域への影響を考慮しながら、科学技術や農業技術の発展といかにうまく調和させていくか。地域の文化と農業・工業を一緒に考えることの重要性を、この事例はまさに物語っています。

福田 今、グローバルという言葉はもっぱら経済分野で多用されています。しかし、私が考える真のグローバルとは、それぞれの地域の文化や特性に基づき、その価値を一層輝かせるためのデザインを、科学技術を用いて行うということです。地域の価値と先進国の科学技術、その組

み合わせこそが本来のグローバルだと思うのです。

東京外大が地域研究によって培った問題意識や方向づけと、農工大や電通大の科学技術をリンクさせることによって、地域をデザインしていく。それこそが、真の「文理協働」ではないかと思えます。

立石 私は常々、環境問題との関わりで学生に言っていることがあります。それは「Think and act globally and locally」つまり、「地球と地域の両方を見据えて考え、行動しなければならぬ」ということです。

この言葉のもとになったのが、92年のリオの地球サミット以来、盛んに言われるようになった「Think globally, act locally」という言葉です。これは「地球規模で考え、地域に根ざして行動しよう」という意味の標語で、1915年にスコットランドの学者ゲッデスが提唱したのと言われています。ゲッデスは今で言うπ型人材で、生物学者であると同時に地理学者、都市工学者でもあるというルネッサンス的マルチタレントを具えた人物でした。しかし、私たちは1人の天才的な人物の出現を待つのではなく、教育を通じて自然科学や文化、経済を総



地球規模の課題解決能力を持った
文理協働型の人材育成に
3大学の連携は欠かせない

合的・包括的に考えられる人間群を育てていかなければならない。その意味で、西東京3大学の連携は大変重要だと思っております。

「文理協働」により 地球的課題の解決を目指す

松永 今、東京外大、電通大、農工大の先生方が結集して、3大学連携のために努力されています。それも一面的な協力にとどまらず、高大接続や教養教育、専門教育、大学院教育など、各フェーズに対応したワーキンググループを作っており組みを進めています。これまで、各大学が独自に検討してきた入試や教育のあり方を、3大学が一緒になって議論しているわけです。立石先生がおっしゃったように、「下から上まで」の協力体制が構築されはじめているということであり、非常に画期的だと思えますね。

立石 まさに「協働」こそが重要だと思っています。その具体的な試みとして、2015年秋、「世界展開力強化事業」の1環である「日本と中南米が取り組む地球的課題を解決する文理協働型人材養成プログラム」が採択されました。これは、中南米諸国で取り組むべき地球規模の課題を解決するために、理系と文系の学生たちと一緒に留学させ、3大学が連携して実践型グローバル人材を養成することを目的としたものです。

福田 このプログラムはまだスタート段階ではありますが、本学にも良い影響が表れ始めています。教員が学生にあれこ

3大学の連携が 生み出す シナジー効果に期待

立石 博高



東京外国語大学長／1976年東京外国語大学外国語学部スペイン語学科卒業、78年東京都立大学大学院人文科学研究科史学専攻修士課程修了。同志社大学商学部助教授を経て、92年から東京外国語大学に在籍。2013年4月より現職。著書に『スペイン歴史散歩―多文化多言語社会の明日に向けて』(行路社)など。

たていしひろたか

れ言うより、学生同士が互いに切磋琢磨しながら「ああ、そうか」と気づいていくほうが、成長が速いですから。もっと多くの学生を送り出せるよう、体制を強化していきたいと思っています。

松永 すでに本学でも、中南米諸国との間で留学生の行き来が増えています。3大学連携の実践編として、「世界展開力強化事業」は大変良いプログラムだと思いますね。

立石 このプログラムの1期生は、社会に出てからも長く関係を持つことになる。それはすばらしいことだと思います。今回の

中南米をモデルケースとして、やがてはアジア・アフリカにも活動を広げていくことになるでしょう。

一方、外国人留学生の受け入れについてですが、これまで

理系の分野では、留学生向けの授業を英語で行うケースが多かったと思います。しかし、最近では産業界でも「日本語ができる人材」を求める企業が増えていると聞きます。その点は、理系の分野ではいかがでしょうか。

松永 本学に留学して日本語を学び、インドネシアで大臣まで務めた人がいます。この方は、日本語を駆使して日本とインドネシアとの交流に尽くす中で、自らの存在感を高められ、今では国家の指導的な立場で活躍されています。この例を見ても、海外からの留学生に日本語を学んでもらうことは大切ですし、我々日本人

にとっても、現地の言葉を学ぶことは今後ますます重要となるでしょう。そういうところから、地域の指導者、ひいてはグローバルな指導者が育っていくのではないのでしょうか。

立石 その意味では、3大学連携において、本学は日本語教育と日本文化の紹介という面で、ご協力できる部分があるのではないかと思います。3つの大学が互いに協力し合って実現できることは非常に多い、というのが実感です。最後に、東京外大への期待をお聞かせください。

松永 東京外大に期待することは、まさに異文化交流ということに尽きます。欧米がお手本だった戦後は終わり、今後は多様な国々との交流が日本の発展を支えていくでしょう。その意味で、世界と活発に交流されている東京外大と連携させていただくことは、理系の我々にとっても大変重要です。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

福田 東京外大は言語を基本にしつつ、地域学にもしっかりと軸足を置いておられます。この地域学という考え方と、それに基づく問題設定や課題発見の力を、ぜひ本学にも伝えていただきたい。大いに期待しておりますので、よろしくお願いたします。

立石 貴重なご意見をうかがい、大変うれしく思っております。本日はありがとうございました。▼





graduated active person in society_02

「東京外大卒」の看板が可能性を開いてくれた 柴田由佳

日本生活協同組合連合会 農畜産部 商品担当



入社して最初の2年間はロシア貿易を担当。現地のイベントでドーナツを作りふるまう姿が新聞に掲載された。

「良い品をより安く」をモットーに、日本人の暮らしを支えてきた「生協」。その商品担当（マーチャンダイザー）として視察や交渉で100回に及ぶ海外出張を経験し、活躍する女性職員の先駆けとなったOBがいる。91年卒業の柴田由佳さんだ。

ペレストロイカで改革機運が高まる旧ソ連に興味を持ち、ロシア語を専攻。長期留学はしなかったが、4年次にヨーロッパと北米を40日間ずつ旅した。

「ソ連の食堂ではヤミでキャビアを買ったり、カナダで出会った女性に『息子の嫁にどう？』と言われたり。海外1人旅も経験して、度胸だけはつきましたね」

卒業後は、女性が働きやすい環境を求めて日本生協連に就職。花形ともいえる商品担当を任されたのは97年のことだ。アジアや欧米諸国を飛び回って交渉に当たったが、異文化摩擦も経験した。

「商品に対する日本の基準は世界一厳しいので、エラーゼロを求めて交渉しますが、『ゼロなんかありえない』と頑なに拒むヨーロッパ

パ人もいて。誤解を避ける意味でも、こちらの意見は率直にはっきり伝えるよう心がけました」

商品担当になって10年が経過した頃、最大の試練が降りかかる。生協が販売する中国製冷凍餃子に、農薬が混入される事件が勃発したのだ。会社は世間の厳しい批判にさらされ、職員はマスクや取引先への対応に追われた。商品開発に関わった柴田さんも警察の事情聴取や経過報告に忙殺され、家に帰れない日々が続いた。

「大変でしたが、周りには本当に支えられました。全員が交代で電話に対応しながら、『何とかなるよ』と励ましてくれたんです」

後に犯人が見つかり、事態は収束したが、「食の安全」に関わる責任の重さを痛感したという柴田さん。その経験を糧として、これからも生活に役立つ商品を作っていきたい、と抱負を語る。

「『東京外大卒は語学ができて当然』と見られる分、海外に行くチャンスも与えられやすい。外大という看板を活かして、いろいろな可能性に挑戦してほしいですね」

しばた ゆか
1991年東京外国語大学外国語学部ロシア語学科卒業後、日本生活協同組合連合会に入社。ロシア貿易や輸入実務の仕事を経験し、97年より商品本部でマーチャンダイジングを担当。以来、農産物や調理冷食、畜産などの分野で、コープ商品の企画開発や仕入れに携わっている。



graduated active person in society_01

英語を使って人と関わる楽しさを伝えたい 田中敦英

桐朋中学校・高等学校 英語教員



中学3年時に出場した「NHK中学生英語スキット・コンテスト」の表彰式。全国からの400近い応募の中で見事最優秀賞に輝いた。

「カレーがインドからどのように日本に伝わり、世界へと広まったのか」。英語による約4分間の音声聞いた後、その内容を1分に要約して英語でスピーチさせる——これは田中敦英さんが高校1年生に行っている英語の授業の一コマ。写真や板書を交えて英語で解説し、生徒とのやりとりもすべて英語だ。「もちろん全部がこのスタイルではなく、この活動に至るまでに読解や文法の確認もします。ただ、生徒には『完全でなくてもよいから英語を使って発信してみよう』と思えるようになってほしい」

音声や解説に真剣に耳を傾け、限られた語彙で答えを絞り出す生徒。その反応を的確にフォローし、わかりやすい英語で授業を進める。教室は楽しさと緊張が入り交じった不思議な空気に包まれる。

もともと英語で人とコミュニケーションをとることが好きだった。中学・高校ではESSに所属し、NHKラジオの「基礎英語」も欠かさず録音。誤って録音し損なった時は悔し涙を流したという。中学3年時には「NHK中学生英語スキット・コンテスト」で全国最優秀賞に輝いた。

「英語教育に興味があり、人前で英語で演じるような体験もしてみたい」と進学先に東京外大を選択。「特に専門課程に進んでからが楽しかったですね」と話す田中さん。英語教育学の根岸雅史教授のゼミに入り、テスト論、教材作成、さらに計算言語学といった分野にも手を伸ばした。「大学3年のある日、帰りの電車で『東京外大に入ってよかった……』と強烈に思った覚えがあります」と懐かしむ。

大学院で英語教育学をさらに究め、2003年に母校でもある桐朋中学校・高等学校の英語教員に。ESSの顧問で、田中さんが教員の道に進むきっかけを与えてくれた恩師と机を並べることになった。「実は、初めて出した卒業生が英語教員の道に進み、この4月に非常勤講師として桐朋に戻ってきてくれました。私自身も何がか影響を与えたことができたのならうれしいですね」と話す田中さん。今日も生徒たちに、英語を使う楽しさを伝え続けている。

たなか あつひで
1979年東京都生まれ。東京外国語大学外国語学部（欧米第一課程）英語専攻卒業。同大学院博士前期課程（ヨーロッパ第一専攻）修了後、母校でもある東京都国立市の桐朋中学校・高等学校の英語教員に。著書に高等学校英語教科書「English Navigator 1」（共著、旺文社）など。2016年4月からはNHKラジオ「基礎英語1」の講師も務めている。

情報伝達の観点から言語を考える

Interview with Masashi Furuhara

多民族国家のインドネシア共和国では、「インドネシア語」が公用語として使われている。

これは、古くからマラッカ海峡周辺で交易語として使われていた、マレー語（ムラユ語）を起源とするものだ。だが、それはこの国の言語文化のほんの表層部分にすぎない。1万3000余の島々からなる同国には、なんと数百にも及ぶ地方語が現存している。ジャワ島西部で使われているスンダ語も、そんな地方語の1つ。今もインドネシア国内でおよそ3000万人が、スンダ語を話しているという。

言語学者の降幡正志氏は語る。「オランダの植民地統治から独立したインドネシアは、国家の統一言語を選ぶ必要に迫られました。こうした場合はマジョリテイの言語を公用語にすることが多いのですが、それだと往々にしてマイノリティからの反発が起こる。そこで、古くから交易語として使われていたマレー語を、公用語として使うことになったのです」

英語中心の教育では見えないものがある

降幡氏は東京都出身。中学の頃から英語が好きで、東京外大を志望したのも自然の成り行きだった。「インドネシア語を専攻したのは、2年次からオランダ語も履修できると知ったため。アジアとヨーロッパの言語が両方学べて、一石二鳥だと思ったからです」

学内の交流会でインドネシア人に片言で話しかけると、相手は思いのほか喜んでくれる。おのずとモチベーションも高まり、留学生の寮に足しげく通っては会話の練習に励んだ。学びを深めるうちに、ある事実が降幡氏の興味を引いた。インドネシア語が、英語とはちがった形で情報伝達を行っていることがわかってきたのだ。



ふりはたまさし
1985年東京外国語大学外国語学部
インドネシア・マレーシア語学科に入学し、
88年バジャラン大学バンドゥンに留学。
94年同大学院外国語学研究所アジア第三言語専攻修了。
同年、専門学校アジア・アフリカ語学院に就職し、
専任講師を務める。2000年東京外国語大学の
講師に就任。2009年より現職。

降幡正志 准教授

大学院総合国際学研究院／言語文化部門

ASEANの主要国として近年、存在感を増しつつあるインドネシア。この国は、数百にも及ぶ言語が存在する多民族国家でもある。降幡氏はインドネシア語と地方語スンダ語の研究を通じて、英語とは異なる情報伝達の仕組みに注目。言語や社会はバリエーションに富んでいるということを視野において、教育に携わる。

文・吉田耀子 写真・竹井俊晴



スンダ地方の伝統芸能「ワヤン・ゴレック」で使う人形。

ンダ語地域のバンドゥンに滞在したのがきっかけだった。インドネシアの言語をより多角的に見るためにも、地方語を習得したい——そう考えた降幡氏は、大学4年の時、バンドゥンのパジャジャラン大学に留学。現地の人々との交流を通じて、言語と文化の両面から学びを深めていった。

「なかでも大きかったのが、イスラムとの出会いでした。留学先ではイスラム教徒の家にホームステイしたのですが、当初はイスラムに対してかなり偏見があった。イスラム教徒は異教徒に対して排他的だと思い込んでいたのです。ところが、ホストファミリーはラマダンの最中も『マサシはイスラム教徒ではないのだから』と、私の食事はいつもと変わらず用意して

人との出会いが道を拓いた

くれた。イスラム教が重視するのは、異教徒と対立することではなく、戒律を守つていかに自分自身を律するかということなのです。思い込みだけで物事を判断してはいけないと気づかされました」

帰国後は大学院に進学し、スンダ語の研究に没頭。94年に修士課程を修了すると、アジア・アフリカ語学院でインドネシア語講師として働き始めた。

だが、ようやく仕事にも慣れた頃、思いがけない不運が降幡氏を襲う。バブル崩壊とアジア通貨危機のあおりで、インドネシア語学科が突如閉鎖されることになった

〈上〉2015年8月にインドネシアガジャマダ大学文化学部主催の国際セミナーで登壇。
〈右〉書籍はセミナーでの発表内容の予稿集。



のだ。定職を失い、ささやかな失業手当で食いつなぐ日々。食費も切り詰め、体重は半年足らずで10キロ減った。印刷会社を経営する父からは、家業を継ぐよう再三説得されたが、降幡氏は「1年だけ待ってくれ」と懇願。近々、母校でインドネシア語の教員公募があることを知り、そのチャンスに賭けてみようと考えたのだ。

採用が決まり、東京外大の講師に着任したのは2000年4月。失業という試練を経て、自分が今日あるのは「運がよかったから」、と降幡氏は謙遜する。

「たまたま選んだインドネシア語や留学先が自分に合っていたことも幸運でしたが、人との出会いにも恵まれましたね。佐々木重次先生をはじめ、いろいろな先生に親

身に相談に乗っていただいた。アジア・アフリカ語学院の先生に、『年に1本は論文を発表したほうがいい』と助言していただいたことも、大きな助けとなりました。一つ一つの巡り合いを通じて、たくさんのヒントをいただくことができました。その積み重ねが大きかったような気がします」

現在の研究テーマは、インドネシア語文法・形態論やコンピュータを利用した言語の音響分析、文法とは異なる言語の情報伝達の仕組みなど。インドネシア語教育を通じて、言語や社会はバリエーションに富んでいることを提示したい、と意気込みを語る。

「今の外国語教育は、どうしても英語を基準に考える風潮があります。でも、英語というのは何千と



インドネシア語初心者のための本(上左・上右)と
言語学者10人のフィールドワーク記録集(上中)。
スンダ語研修テキスト(下)。



ある言語の1つにすぎない。よく『日本語は主語を言わないから曖昧だ』といわれますが、主語がないのは本当に良くないことなのか。学生の固定観念を揺さぶるような言語教育をやりたいですね」

東京外大を母校とするだけあって、キャンパスへの愛着には並々ならぬものがある。では、この大学の魅力とは何か。降幡氏はOBとして力強く断言する。

「東京外大では、すぐ横に異文化がある。自分と違う文化を身近に体験できるという意味では、かなり恵まれた環境だと思います。卒業生は海外志向が強く、新しい分野に挑戦することに抵抗がない。学生時代に外国語を集中して学んだ経験は、どんな形であれ、後で必ず生きてくるはずですよ」

一次史料の先に広がる豊穡を求めて

Interview with John Patrick Porter

近世日本には、士農工商の下

に、「機多・非人」と呼ばれる身分が存在した。彼らは被差別民として社会から、町方での居住や生産的労働から疎外されたが、江戸や大阪のような巨大都市を維持するためには不可欠な存在でもあった。被差別民は、処刑の執行や警察の末端業務、ゴミ処理、斃牛馬の処理、皮革加工などの実務を担い、都市社会において重要な役割を果たしていたのである。

「幕末維新といえば薩長や元勲の話が中心で、民衆の営みについては捨象されがちです。しかし、実際に歴史を作るのは民衆だと、私は考えています。幸い日本では、被差別民も含めて、民衆が書き残した日記や手紙などが大量に残っている。こうした史料を読むことによって、過去に生きた民衆の営みの意味をすくい上げたい。こうした考えから、実証的歴史学の基礎となる一次史料の分析に力を入れています」

「幕末・維新时期日本の巨大都市に

おける貧民の救済と統制」を専攻する、ジョン・パトリック・ポーター氏は語る。

日本の被差別民の史料は世界遺産に値する

米国生まれのポーター氏が、ハイスクールで日本語を学び始めたのは13歳の時。「海外で活躍するビジネスマンになりたい」と考えての選択だった。そんなポーター氏が研究者を志したのは、大学の授業で、現代米国の社会問題について学んだのがきっかけだ。得意の日本語を生かし、戦後の大阪におけるホームレス問題について卒論を執筆。大学院2年目の夏休みに来日し、大阪市西成区で現地調査を行った。

「当時、天王寺動物園の脇にホームレスのテント街があり、そこで数人の路上生活者と親しくなりました。ここで3カ月間、日々聞き取り調査を行ったのですが、この地域と都市貧困との関係は戦後に

始まったものではなく、戦前まで遡ることがわかってきた。それで、西成の現状について調査するだけでなく、スラムの形成過程についても見る必要があると考えるようになったのです」

西成における都市貧困の根源を明らかにするためには、その歴史的な経緯を明らかにしなければならぬ——そう気づいたポーター氏は、07年、フルブライト奨学生として大阪市立大学に留学。ここで、歴史家・塚田孝教授との運命的な出会いを経験する。

塚田教授は、近世の都市社会史研究の第三波を率いた研究者の一人で、都市下層民研究では学界のリーダー的存在。ポーター氏は塚田教授の下で一次史料の読み方を学び、実証的な歴史学研究の基礎を叩き込まれた。一次史料とは、古文書や日記、手紙など、当時の人々が書いた生の記録のこと。江戸時代の貧民が書き残した文章を紐解くと、そこには想像もつかない世界が広がっていた。日々の



ジョン・パトリック・ポーター

2005年カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校でMPhil取得。07年フルブライト奨学生として来日し、大阪市立大学の塚田孝教授の下で実証的歴史学を学ぶ。2012年PhD取得（ハワイ大学マノア校）。日本学術振興会や大阪市立大学・都市研究プラザの研究員を経て、2015年4月東京外国語大学大学院国際日本学研究院の専任講師に着任。専門は日本近現代史、都市社会史、貧困史。

ジョン・パトリック・ポーター 講師

大学院国際日本学研究院

近世日本において、被差別民はらち外の民として厳しく差別された。その一方で、彼らは都市のインフラを支える重要な役割を果たしてもいた。被差別民が残した日記や手紙、古文書からは苛酷な日々を生きた彼らの息遣いが伝わってくる。一次史料に魅せられた米国生まれの歴史学者が、近世史の知られざる側面に光を当てる。

文・吉田耀子 写真・竹井俊晴

出来事や仲間との関係、自分の職分についての考えなどが率直に綴られ、それまで抽象的な存在でしかなかった貧民の生活が、目の前にありありと浮かんでくる。その面白さに魅せられ、ポーター氏は夢中で一次史料を読みふけた。

ポーター氏を驚かせたのは、史料に含まれる内容の豊かさだけではない。乞食として生きた非人が

文章を書き残していること自体、他国では考えられないことだった。下層民の大半が文盲であった西洋社会では、下層民が自ら一次史料を書き残すことなど考えられない。日本の民衆史の研究者がいかに恵まれているか——後年、ポーター氏はそれをあらためて実感することとなる。

来日後の研究成果をまとめて、



候文で書かれた一次史料を読み解き、当時の社会像を構築する。

自力でオリジナルな研究ができる学生を育てたい

15年4月から東京外国語大学で教壇に立ち、日本近現代史の授業を担当している。「一次史料を緻密に分析し、当時の社会像を構築するのが私自身の研究スタイル。したがって、私のゼミでは、史料の読解力をまず身につける必要があります。古文書

を読むためにはそれなりの努力が必要ですが、いったん読めるようになれば、想像をはるかに超えた面白い発見ができる。先行研究に依存することなく、自力でオリジナルな研究ができる学生を育てたい。それと同時に、現代の社会問題について考えるための視座も与えようと試みています」

ポーター氏の熱意に感化されたのか、開講まもなく、研究者を目指す学生が続出。学生の高い関心に応えようと、課外授業として史料の輪読会も行っている。

今後の目標は、19世紀末期における大阪の下層社会について、日英2カ国語で単著を出版すること。さらに、東京の賤民組織の解体過程についても単著をまとめたい、と抱負を語る。

外国語としての日本語を駆使し、一次史料を縦横無尽に読み解きながら、日本の民衆史に新たな光を照射しつつあるポーター氏。自らの体験から、語学との向き合い方についてアドバイスする。

「東京外大に来て、外国語を学ぶだけでは不十分。それと同時に、社会についても学ぶ必要があります。たとえ外国語を身につけたとしても、社会に関する知識がなければうまく活用できない。重要なのは発音や文法ではなく、言葉の中身です。批判的思考力を持ち、意味のある発言ができる人間を目指すしてほしい」



「部落問題研究」
2015年4月号に
「明治初期東京における
貧民の救済と統制」
について発表した。

身分的周縁論の深化、
近代における乞食層の解明、
近代の地域支配構造の
新たな展開などを
著した書籍。



「聴」

kiku

「聴は耳を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経っても色褪せることなく、深く心に刻まれている……。

1.

雨だれとオルガン

大学院国際日本学研究院 准教授
谷口龍子
Ryuko Taniguchi

「音楽は

自然界がもつ自然音、風とか、波とか、物が落ちる音とかとは異なって、人間の意志、または理知によって組み立てられたものです。」とは、日本が世界に誇る作曲家、伊福部昭の言葉である。

その自然界の音と音楽との崇高なコラボレーションの瞬間に遭遇した経験がある。

80歳を超える孤高の音楽家グスタフ・レオンハルトの音を再び日本で聴けることを知ったのは前売り開始の数週間前であった。これまでのようなコンサート・ホールではなく、

大学のチャペルでリサイタルが行われるという。なんでも、そのオルガンは、レオンハルトも愛したアムステルダム教会にある18世紀のオルガンをモデルにしたヘンク・ファン・エーケン製作だとか。当時の材料と工法で再現した、世界でも数少ないものだそう。現代では電気で行う送風を人力で行うことが可能になっている。

そのオルガンの使用をレオンハルト自身が所望したということでファンの間では話題になっていた。

その日は朝から雨が降っていた。リサイタルが始まる夕方になると、雨脚はますます激しくなった。気まぐれな突風に容赦なく雨を吹きつけられる。人々は傘を斜めにして雨風を凌ぎ、チャペルの前に列を作って扉が開くのを待っていた。予定時間よりいくぶん早め

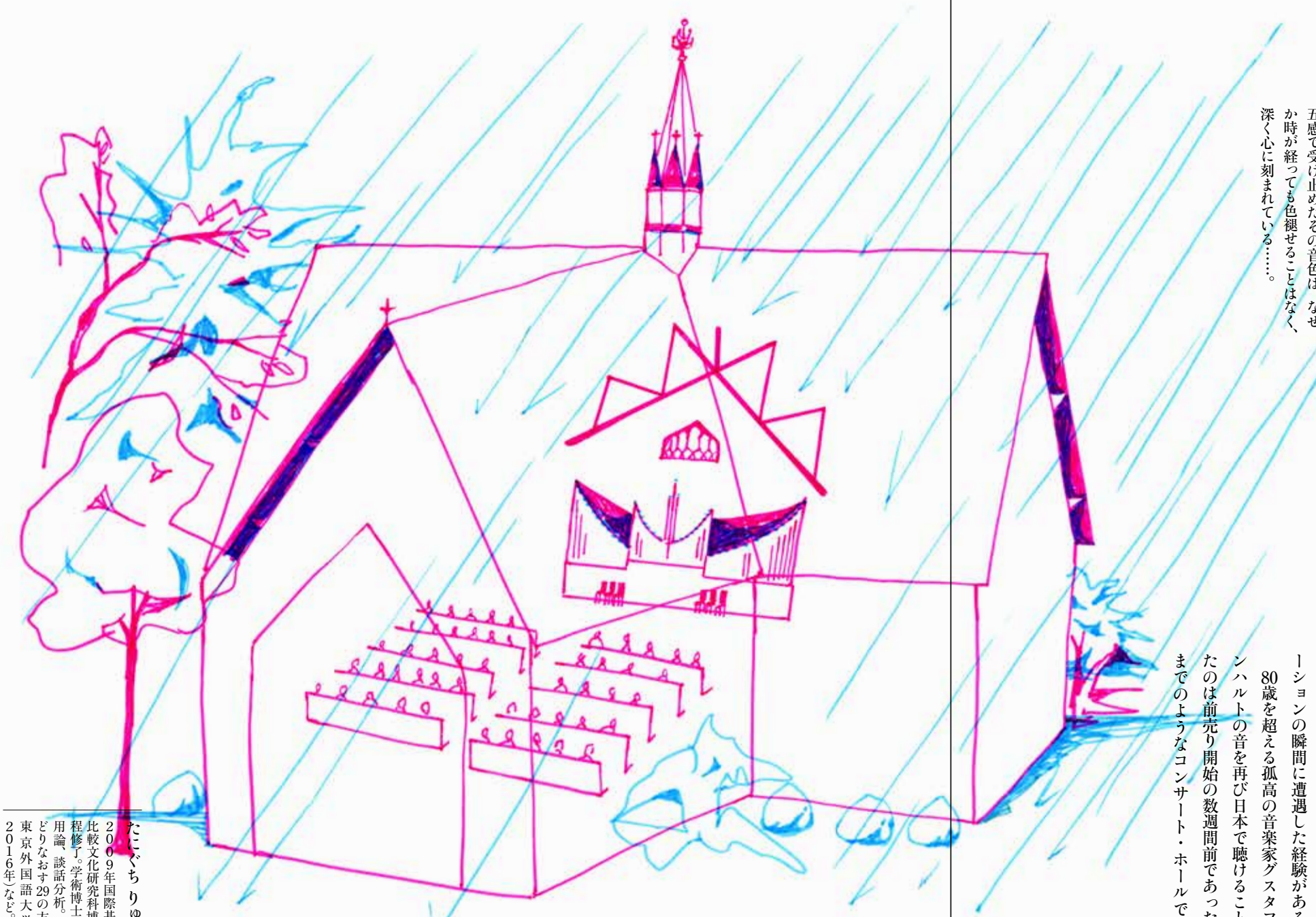
の開場となり、約百年前に建てられたチャペルの中に入ると、雨が屋根に打ち付ける音、そのしずくが軒差しに当たる音、長椅子のきしみ音まで入り混じり、様々な音が混在する有様だった。

そのような喧騒の中で、いつものようにレオンハルトの音は唐突に始まった。

オルガンはチャペル二階の高い位置にあり、観客の位置から演奏者の姿は見えない。まるでレオンハルトが各々の作曲家と対話し、私たちはただそれを拝聴するかのようであった。スウェーリンクのプレリューディウムに始まり、ラインケンのトッカータ、フィッシュヤーのシヤコンヌと続くと、それまで容赦なく打ち付けていた雨音が程よい音量となった。貴なる鍵盤の音は、雨や風の音を通奏低音として従えたのである。観客は崇高なる鍵盤の音と自然界の音とのコラボレーションにいつしか身を委ねていた。パーセルのヴォランタリー、ベームのコラールで締めくくられると、会場からはかすかなため息に続いて盛大な拍手が沸き起こった。私の席からは横顔しか見えなかったのだが、チャペルの二階から観客を見下ろしたレオンハルトは、常にクールな彼にしてはめずらしく微笑み、温もりが感じられた。余韻覚めやらぬまま会場を出ると、いつしか雨は止んでいた。

孤高の巨匠グスタフ・レオンハルトの訃報を聴いたのはそのほぼ半年後、2012年の1月であった。■

たにがちりゅうこ
2009年国際基督教大学
比較文化研究科博士後期課程
修士、学術博士。専門は語
用論、談話分析。『日本をた
どりなおす29の方法』(共著
東京外国語大学出版会
2016年)など。



2.

大教室で 受講者の声を聴く

アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授
石川博樹
Hirotaki Ishikawa

研究と

教育において何かを聴くことは多い。それぞれに難しさはあるが、なかでも大教室で行う講義で受講者の声を聴くことはなかなか難しい。少人数で行う演習(ゼミ)や講義と異なり、多数の受講者が出席する大教室の講義は、一方通行なものになりがちである。

歴史上の大国、あるいは世界の注目を集めているような地域の歴史を研究しているのであれば、講義において普段自分が進めている専門的な研究の内容を話し、その理解については受講者の努力に委ねればよいのかもしれない。しかし日本人にとってなじみがなく、適当な概説書すらないアフリカ史を研究している私は、そのようにするわけにもいかない。そこで私は歴史学という自分が専攻する学問分野に固執せず、これまで研究を進めるなか

で出会い、感銘を受けた先達の研究の紹介を織り交ぜて講義を行っている。そのような講義を通じて現代社会とアフリカ史のつながりを提示しつつ、私は受講者にアフリカについて知る意味、そして歴史を学ぶ意義を考えてもらう。

内容の理解が鍵となるこのような講義を進めるためには、取り上げるテーマについて受講者がどの程度予備知識を持ち、どのように感じているかといったことを把握することが重要となる。そのため私はしばしば受講者にコメントシートを配布し、講義の感想や質問を書いてもらう。

最初はぎこちなく遠慮がちにコメントが多いものの、授業が進行するにつれ、コメントシートの内容は変化する。驚くのは、授業内容についての感想やそれを基に考えたことを、

3.

聴く知性

大学院総合国際学研究院／国際社会部門 教授
金井光太郎
Kotaro Kanai

百聞は一見にしかず。その通りである。人の話を色々と長々と聞いてもイメージを余りよくつかむことはできない。図や表、写真、さらには動画で画像を見れば情報をかなり明らかに確かめることができる。授業でも話だけを聞かされるのは退屈であり、パワーポイントを通じて面白いことを手軽に知りたいの思いになるのである。しかし、このわかりやすさは一体どのようなものか。何をつかめるのか、どのようにつかむのか。聴くことと対比して考えてみたい。

講義は「聴」講するものである。義は聴くことで理解に至りうる。その場合、耳で聞くこと自体で理解に至るものではない。聴くことは対決なのである。人から伝えられる未知を自分の内なる既知と対決させて吸収し新たな知を築くことである。しかも、聴くことは一次元の情報を受け取り自己の精神の中で二次元の、さらには三次元の世界像へと再構成する営為である。非常にエネルギーを要し、しんどい作業となる。そのようにして未知と既知との知的格闘を経ることによって古い自分が壊され、新しい知が自分のものとなる。現在の自分に満足せず成長を続けることが聴

饒舌かつ雄弁にコメントシートで語る受講者の多さである。なかには「一を聞いて十を知る」とはまさにこのことだなと感じ入るほどに、講義の内容を的確につかみ、その背後に広がる深遠な問題にまで思いをめぐらせる優れた受講者もいる。私の拙い授業からでさえも、驚くほど多くのことを学んでくれる受講者がいることを知って励まされることは多い。このようにコメントシートを介して大教室で受講者の声を聴きながら、私は講義の改善を重ねていく。

「そのようなことは演習で行えば十分ではないか」という意見もあるだろう。しかし、選択科目の一つであるがゆえに、限られた期間しか接することができない受講者だからこそ、大学の教壇に立つ者として、伝えるべきメッセージがあり、聴くべき声があるのではなからうか。そのようなことを考えながら、私は大教室で受講者の声を聴き続ける。▼

いしかわひろき

2004年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。専門はアフリカ史。著書に『ソロモン朝エチオピア王国の興亡』、オロモ進出後の王国史の再検討(山川出版社2009年)、編著に『食と農のアフリカ史：現代の基層に迫る』(共編、昭和堂2016年)がある。



かないこうたろう

東京大学大学院法学政治学研究科博士課程中退、米國ブラウン大学留学。専門はアメリカ建国期の歴史。著作『アメリカにおける公共性・革命・国家』(木鐸社)、『アメリカのアイデンティティとナショナリズム』(共著、彩流社)など、訳書『ベンジヤミン・フランクリン、アメリカ人になる』(共訳、慶應義塾大学出版会)など。

くことによって可能となる。わからない話の意味がないのではない。今の自分がその世界を持つていないだけなのかもしれない。

しかし現在、一見のわかりやすさを強く求める傾向があるように思える。それは今の自分を壊したくないとの心性、新たな知に挑戦してゆくの消極的な心性を表しているのではないだろうか。一見してわかるのは、その情報がこれまで自分の持つている知識の中に単に位置づけることで済んでしまうからである。ああ、このことか、わかっていよ。自分は変わらなずその世界像の通りに現実はあると安心する。新たな知の世界があることを常に求め挑戦することを避けることが聴かない姿勢を作っているのではないだろうか。たとえば、スマホ依存はその典型であろう。便利ではあるが危険な道具である。限られた情報を広く集めることができる。自分と同じ意見だけを探せばいくらでもある。偏りには見えないし安心してその世界に閉じこもる。

そんな今こそ聴くことが重要である。それは手間がかかるし、葛藤を伴う。でもスマートにわかってしまうのは結局知性の大事な部分から逃げていくことになる。古い自分を壊すこと。古い自分との対決を恐れず、真実に常に一歩でも近づくことが大事なのである。一つ一つの話を聴いてわからなくなる、そこで考え、体系的に再構成する。そうした聴くことを楽しめる知性こそが、時代を超えて求められている。▼

「語劇を通じて理解したブラジル文化」

Influential Face 歴史を刻む 在学生

Text by
Akiko Sakashita
Photo by
Misato Iwasaki



〈上〉2015年12月23日、群馬県太田市で上演したポルトガル語劇の様子。
〈中〉語劇「オルフェ」で実際に使用した衣装。
〈下〉ポルトガル語の授業で使った教科書。びっしりと書き込みが。



中学生の頃から英語が得意で、大学は語学系への進学を決めていた。英語以外の言語も学びたいと考え、選択肢が多い東京外大を志望校に。ポルトガル語を選択した理由は、「ブラジルに暮らす親戚がいて、身近に感じていたから」。

1年生の時は、ポルトガル語の勉強とアメフト部の練習の両方に励んだが「勉強とスポーツの両立は難しい」と実感。自分の目標は「ポルトガル語をマスターするために、3年生で派遣留学をする」こと。そのような思いから勉学に注力する道を選択した。

2年生になると、外語祭の名物「語劇」の準備が始まる。演目は名作「オルフェ」で、リオデジャネイロのフェヴェーラ(スラム街)が舞台の恋愛劇。高橋さんは主人公と対立するギャングのルシーニョ役を担当することになった。ポルトガル語劇は外語祭だけでなく、ブラジル人が多く居住している群馬県太田市でも上演される。普段の授業では習うことがない、スラングやネイティブの発音に戸惑ったが、映画を何度も何度も繰り返し観て、セリフを覚えた。

「ネイティブの先生から演技や発音を指導していただき、ポルトガル語の音に慣れ、発音にも自信ができました」

太田市で上演後、観客のブラジル人から「リオに行ったことがあるの?」と聞かれたことは、うれしかったと回想する。

語学が上達したことはもちろんだが、語劇を通して言葉の背景にある文化に触れ、自分の視野が広がったことが何よりも収穫だったと高橋さんは言う。

「ブラジル人は時間にルーズといわれますが、多文化・多民族社会だからこそ、他人の意見や主張を受け入れる文化なのだと感じました。ブラジルの文化に触れたことで、自分の考えだけを相手に押しつけるのではなく、そういう考え方もあるなと、他人に対して寛容になりました」

今年9月から派遣留学生としてポルトガルの大学に通う高橋さんは、さらなる語学のスキルアップを目指す。■

Yuki Takahashi
1995年生まれ。埼玉県出身。
高校生の頃からスポーツと勉学に励み、
さまざまな言語を学びたいという気持ちから
2014年に東京外国語大学に入学。

自分の語学力がどれだけ
通用するのか。
それを試すために
ポルトガルの大学へ行く。



Information

東京外大のメンバーに
なった方々から
コメントをいただきました

2015年
10月1日より
着任

大学院総合国際学研究院
特任助教 日本語教育

渋谷 博子

SHIBUYA Hiroko



「日本語教師」という教える立場ですが、さまざまな出身地や背景を持った学生たちが、同じ言葉を使っている、新しい出会い、新しい気づきを得る場に日々遭遇し、自分自身も新たな視点を得ています。教室でできることには限りがありますが、彼らの夢の実現に少しでも役に立てるよう、よりよい学習者支援を模索しています。

2016年
2月1日より
着任

世界言語社会教育センター
特任講師 アフリカ地域研究

大石 高典

OSHI Takahiro

環境問題への関心から生態人類学を学ぶようになりました。アフリカのカメルーンの熱帯雨林にある村に通い続けて14年になりますが、毎回発

2016年
4月1日より
着任

大学院総合国際学研究院
講師 モンゴル近現代史

青木 雅浩

AOKI Masahiro



専門は20世紀のモンゴル・ソ連関係史です。遊牧社会に生きるモンゴル人が、諸外国の影響を受けながら、近代的な民族独立国家の建設のために活動するとか、という問題に興味を持ち、研究の世界に入りました。日本とは異なる遊牧社会の近現代史を通じて、世界の多様性や民族運動の実態について、皆さんと考えていきたいと思っています。

世界言語社会教育センター
特任助教

内海 陽子

UTSUMI Yoko

日本語教育に従事するようになって、十数年。それ以前は、アパレル企業で働いていました。この仕事をするようになって気づいたことは「教



見があります。人類学は、世界的実践に関わりながら、再帰的に自己変革を行う運動の一つです。世の中を少しでも面白くしたい、面白いことをやりたいという仲間が少しずつ増えていったらいいなと思っています。

世界言語社会教育センター
特任講師 国際政治学

中山 裕美

NAKANAMA Yumi

私が「国際関係」を生業にしようと思ったきっかけは、20数年前に起こったルワンダ大虐殺でした。幼いながらも、想像を絶する世界があるという驚きと、日本に暮らす幸せを感じたことを記憶しています。今は難民や移民を取り巻く国際関係を研究しています。が、国家と国家の境界を跨いで生きる人々が苦境を生き抜く姿から、多くの刺激を受けています。



えることは教わることもありますが、ということ。留学生の皆さんが抱く素朴な疑問・奇想天外な質問に触れることで、新しい発想を得ることができ、前職では経験できなかった毎日に感謝しつつ、日々格闘しています。



アジア・アフリカ言語文化研究所
准教授 バントウ諸語、記述言語学

品川 大輔

SHINGAWA Daishuke

アフリカのサハラ砂漠以南で広く話されているバントウ諸語の研究をしています。2000年以降、キリマンジャロ山周辺の民族語の調査を継続的に行っており、実はこの原稿も山麓の小村ウル・シンブウェでの調査の合間に書いています。「分け入っても分け入っても青い山」(山頭火)。村人たちが助けられながら未知の世界を広げていけることに感謝です。



世界言語社会教育センター
特任助教 経営学

渡辺 周

WANABE Shu



私の専門は経営学、その中でも特に経営戦略論・経営組織論です。経営学というのは「企業経営に関わる現象を対象とした応用的な社会科学」だと私は考えています。ビジネスに関する単なるテクニクやノウハウではなく、企業活動に関係する世の中の現象について整理・理解し、背後のプロセスやメカニズムを説明することに貢献していきたいと考えています。

2016年
3月1日より
着任

世界言語社会教育センター
特任講師 国際経済学

出町 一恵

DEMACHI Kazue

株価、為替や天然資源価格の変動に私たちの経済は一喜一憂します。しかし遥かにそれ以上に、天然資源輸出に経済を依存する発展途上国の

大学院総合国際学研究院
准教授 フランス社会経済史

芹生 尚子

SENU Naoko



専門はフランスの近世および近代史です。とりわけ、政治的・経済的に大きな変化が胎動する啓蒙の世紀における個人や集団の体験に関心を持っています。過去に起こした事件を確認することは、今をより良く生きるために重要な作業ですが、授業を通じて歴史の「有用性」を若い世代の人々にできるだけ具体的に伝えることができれば幸いに思います。

特命事項担当室(1R)
特任助教 統計学

高橋 将宜

TAKAHASHI Masayoshi

専門は社会統計学です。特に、欠測データの統計分析手法を研究しています。本学着任前までは(独)統計センタにて、公的経済統計に必要な技術の研究に従事していました。本学では、経営戦略情報本部に所属し、大学の経営



人々の生活は、国際市場での価格の変化、世界経済の動向に大きく左右されています。国際金融市場や世界経済の動きを通して離れた国の人々の暮らしを眼差す視点を、皆さんと一緒に深めていきたいと思っています。

2016年
3月20日より
着任

世界言語社会教育センター
特任講師 南アジア地域研究

日下部 尚徳

KUSAKABE Naonori



南アジアのバン格拉デシュを中心に国際協力の現場を歩いてきました。国際協力の現場では、地域の文化や社会構造への不理解からプロジェクトが予定された効果を生まないケースが少なくありません。これからの対象地域を自らの足で歩き、そこに暮らす人々からの学びを大切に、地域立脚型の国際協力を考えていきたいと思っています。



や教育に関する情報分析(IR分析)を行っています。また、社会科学のための統計分析の授業(日本語と英語)も担当しています。

世界言語社会教育センター
特任講師 多文化共生論

土田 久美子

TSUCHIDA Kumiko



本学では多文化社会に関する授業を担当しています。社会的マイノリティの人々がどのように自分たちの課題を社会に提起し、改善や解決の活路を見出すのか。地方に住む外国出身者やアメリカの日系コミュニティの調査研究を行ってきました。国内外のいろいろな社会的課題に関心を持つ皆さんとの議論を楽しみ、共に成長できるように努めたいと考えています。

Information

アジア・アフリカ言語文化研究所
准教授 南アジアの人類学

外川昌彦

TOGAWA Masahiko



文化人類学が専門で、インドのヒンドゥー教社会をテーマに研究していました。その後、バン格拉デシュにフィールドを移し、イスラーム世界を通して多様な文化が地域社会で共生する姿を探求しました。異文化の多様性を理解すること、日本社会における多様性や異文化の共生を理解するヒントを与えてくれます。皆さんと議論ができるのを楽しみにしています。

特命事項担当室
特任教授

長崎輝章

INAGAKI Teruaki

3月末にバチカン大使を最後に39年間勤めた外務省を退官し、ご縁があつて4月より国際交流等を担当しています。世界が舞台の東京外大は国際交流の宝庫であり、先駆者です。国際的な人材の養成、地

2015年
10月1日より
着任

世界言語社会教育センター
特任准教授 インドネシア語

ダニエル・ハリマン・ヤコブ

DANIEL HARMAN JACOB

東京外大では、熱心に学ぶ学生を教えることにやりがいを感じています。彼らが日本とインドネシアの架け橋となることを切に願っています。



2016年
4月1日より
着任

世界言語社会教育センター
特任講師 英語

イリチュ、ピーター

ILIC Peter



私は、協働学習に関する教育学を専門としています。東京外大での教育にも活かされることを期待しています。

特命事項担当室
教授 スペイン現代史

萩尾生

HAIO Shô



特命事項担当室で本学の国際学術交流を推進しつつ、教育・研究活動に従事しています。専門は現代バスク地域研究で、バスク語・文化の対外普及における「ウチ・ソト」の境界区分原理が目下の主たる関心です。「バスク」という「スペイン」です。うという反応を受けますが、バスク人は世界中に離散しています。思考の枠組みは、国民国家の枠組みから自由でありたいと考えます。

保健管理センター
特任教授 医学

山本勇

YAMAMOTO Isamu

2016年4月より保健管理センターに着任しました、内科医です。保健管理センタ

世界言語社会教育センター
特任教授 中国語

張書傑

CHAO, Shuokesu



外国語の学習は、異文化を洞察する窓を築くことでもあります。言語とは、民族の心と固く結びついているからです。私と一緒に中国語という窓を築き、その意味と美の世界に入っていきます。

世界言語社会教育センター
特任講師 ドイツ語

ヘンドリックス、クリストフ

HENDRICKS Christoph



外国語としてのドイツ語のほか、法学も専門としています。ドイツと日本の長い歴史を思いつつ、今後この東京外大で、新たな架け橋を築いていきたいと思っています。

1の役割は学生・職員の方の健康の保持・増進を支援すること、さらに急な体調の変化に対応するプライマリケアセンターとしての立場です。健康は毎日の生活習慣が大切です。どうぞ心身の健康に関することは、気軽に相談にいらしてください。



アジアカリカ言語文化研究所
助教 芸能の人類学

吉田ゆか子

YOSHIDA Yuuko



専門は文化人類学です。インドネシアのバリ島やその周辺地域の芸能文化や宗教について研究しています。近年は、特に仮面を用いる舞踊や演劇に関心を持っています。自分でも仮面舞踊を学び、現地で奉納上演に参加しながら調査を行っています。仮面をかぶることも、またそれを脱ぐことにも、独特の楽しさがあります。

世界言語社会教育センター
特任准教授 フランス語

ルボワ・ジェローム、アンドレジャン

LE BOIS Jerome Andre Jean



「まずは汝自身を知れ」。言語の習得には、地域による文化や思想の差異への理解が不可欠だと実感できる授業を心がけています。

世界言語社会教育センター
特任准教授 ベトナム語

レティ・タイン・タム

LE THI THANH TAM



東アジア文学が専門です。東京外大では、学生・教員の皆さんと交流できることがとても楽しいです。

2016年3月、
退職された先生たち
からの「手紙」



大学院国際日本学研究院
准教授

佐藤宏孝

SATO Hirofumi

私は、1984年に、当時東京都府中市住吉町にあった外国語学部附属日本語学校に赴任しました。それ以来32年間、留学生たちに数学を教える仕事をしてきました。

附属日本語学校はその後、1992年に留学生日本語教育センターに改組され、2004年には朝日町キャンパスに移転して、現在に至っています。

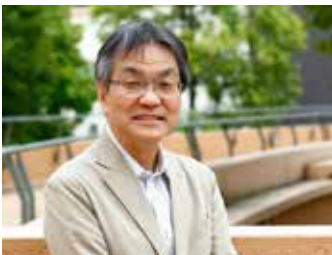
留学生への数学教育のほかに、学部の学生向けに「数学の考え方」という授業を担当しました。この授業は、文系

学生への一般教養的な授業だったので、まったく自由に題材を選んで話すことができました。楽しかったです。特に、格子多角形の面積を求める時に使う「ピツクの定理」というほとんど予備知識がいらず、その割には文系の学生でも楽しめる定理をゆつくりと話せたのは良かったです。思い出に残っています。

32年間、無事に勤めることができたのは、東京外大教職員の皆さまと学生諸君のおかげです。本当にありがとうございます。



『大いなる遺産』
岩波書店
ディケンズ(著)
一言……「専門とは、関係のない本ですが、好きな本なので推薦します。退職後はたくさんあるディケンズの長編をゆつくり読もうと思っています」



大学院総合国際学研究院
教授

中野敏男

NAKANO Toshio

異種格闘技というところと変ですが、さまざまな学問領域の人々が寄り集まって現代世界の「問題」を中心に議論を戦わせ、それが既存の学問や思想にも刺激を投げ返す、そんな自由な学問の雰囲気がある先代にはありません。力量ある先輩たちが作ってくれた大学の個性ですが、そのおかげで戦後東アジアの問題にも植民地主義の問題にも連携した研究が生まれ、領域を超えた問題提起も可能になったのだと思います。

そんな大学がどこに行くの



『詩歌と戦争 白秋と民衆、総力戦への「道」』
NHK出版
中野敏男(著)
一言……「自著ですが詩歌を素材に、戦争の歴史とそこに生きる民衆の心情にアプローチした本です。こんな切り口もあるのかと知ってほしいと思います」

か、ちよつと心配ですね。「自発的隸従」という言葉がありますが、文科系大学の存在意義を疑問視する経済界や文科省の意向を過剰に先取りして批判精神を失い、技術のみを切り売りするような「教育」への道を歩むなら、この大学に託された学生諸君の夢を裏切ることになると思います。政権にいいなりのメディアや言論界が問題となつていますが、そんな時にさすが東京外大卒と言われるような見識ある人材を輩出する大学であり続けてほしいと思います。



大学院総合国際学研究院
教授

二木博史

FUTAKI Hiroshi

の上でもさまざまな便宜を図つてもらっています。

ちょうど東京外大に職を得た1989年にモンゴルで民主化運動が起こり、盤石と思われていたソ連中心のシステムが崩壊し、まったく新しいモンゴル研究が可能になったのは、幸運でした。

この数年は、中国でのモンゴル研究の中心になっているフフホト、蘭州などの大学で講演をする機会が増えました。今後も、モンゴル以外に住むモンゴル人との付き合いを大事にしようと思っています。



『ことばと国家』
岩波書店
田中克彦(著)
一言……「国家や民族や共同体とことばの関係を分かりやすく論じた社会言語学の入門書。言語を重視した地域研究を進める学生に最適」



アジア・アフリカ言語文化研究所
教授／副学長

宮崎恒二

MIYAZAKI Koji

AA研で32年を過ごしました。文化人類学の観点からジャワを中心に王権や暦占、移民などの研究に従事しました。研究所という恵まれた環境で国内外の研究者と共同研究できたことは幸せでした。採用当時は、時間はあるが金がなく、海外調査もなかなか行けませんでしたが、後には金はあるが時間がなくて海外調査に出かけることが少なくなりました。これから活躍される方々にとって、時間も金もないというような時代が到来しないことを願っています。

私のキャリアの後半は、組織の運営・経営にかなりの時間を費やしました。しかし、教育研究の現場とは異なる視点や発想を必要とするこの領域は、異文化でのフィールドワークのような貴重な経験を与えてくれました。

世界の諸地域に関する教育研究を特徴とする東京外大は、これからの時代、社会の中で重要な役割を担っていくことになるでしょう。長い目でしっかりと将来を見据え、さらなる高みへと発展することを願っています。



『野生の思考』
みすず書房
クロード・レヴィ＝ストロース(著)
一言……「我々が学んできた思考や論理が唯一絶対のものではないことを教えてくれる。流行とは関わりなく、読まれ続けるべき本」